

Intentio と時間

坂 田 登

intentio という言葉の本来の意味とは、その名の示すとおり、in-aliquid-tendere 即ち「何か或るものに向う」ということであるが、アウグスティヌスやトマス・アクィナスにおいてこの言葉はさらに重要な意味をもって用いられているように思われる。アウグスティヌスによると intentio とは、⁽¹⁾ 感覚や知性による認識においてその視像 (visio) や心像 (imago) を構成するはたらきであり、それは認識される対象と視像や心象との間に成立するものである。⁽²⁾ このような intentio は彼の時間論においても重要な意味を有している。彼は時間を人間の主体のうちに見いだされる精神の一種の延長 (distentio)、つまり精神の有する intentio の、記憶としての過去、直観としての現在、期待としての未来への分散 (distentio) としての延長であるとしている。このような intentio のはたらきによって精神のうちに時間が成立するのであるが、また同時に、分散した intentio を一つに集め、目前のものへと集中 (ex-tendere) することによって、時間的分散の状態も克服されるのである。

そこで、上記のようなことを念頭に置いた上で、ここではトマスにおける intentio 特に人間の有する intentio 及びそれと時間との関係について考察してみたい。なぜならトマスは intentio について考える上でアウグスティヌスからも多くの影響を受けていると思われるからである。⁽³⁾ またそうすることによって、アウグスティヌスの言う intentio やそれと時間との関係について考察する上での手がかりも得られるのではないと思われる。

人間は感覚、知性、欲求、意志などにおいて様々な形で intentio を有している。まずこれらの各々における intentio の在り方について簡単に述べてみたい。

感覚による認識において、対象としての質料的物事は、既に現実⁽⁴⁾に可感的なものとして感覚を変化せしめる (transmutare) ことができる。このような対象から感覚が蒙る変化とはどのようなものであろうか。変化には自然本性的 (naturalis) 変化と靈的 (spiritualis) 即ち intentionalis な変化とがある。自然本性的変化とは、変化せしめるものの形相が変化せしめられるもののうちに自然本性的エッセ (esse naturale) に従って受けとられることによって成立するものである。例えば、熱するものが有する熱の形相が熱せられるもののうちに自然本性的エッセに従って受けとられる場合がそうである。他方、intentionalis な変化とは、変化せしめるものの形相が変化せしめられるもののうちに esse intentionale に従って受けとられることによって成立するものである。例えば色の形相が瞳のうちに esse intentionale に従って受けとられる場合がそうである。このようなことによつては、瞳は実際に (reale) 着色されたりはしない。そして如何なる認識もこの intentionalis な変化によって始めて成立するのである。⁽⁵⁾ 感覚認識においても、感覚器官の自然本性的変化を前提した上でさらに intentionalis な変化が生じなければ、それは成立しないのである。あらゆる質料的可感的物事は存在している限りにおいて、感覚器官へと自然本性的な仕方ではたらきかけると同時に、それとは異なった仕方⁽⁵⁾で感覚へと intendere し、そこに自らの形相を運び込む。感覚はそれを esse intentionale に従って受けとることにより、intentionalis な変化を蒙る。このようなことにおいて可感的形象 (species sensibilis) としての可感的形相の intentio が感覚において実在することになる。そしてこののち可感的形相の intentio は記憶力 (vis memorativa) などにおいて保持されるようになる。

こうした感覚による認識を前提した上で、次に知性による認識が行なわれる。可感的、質料的物事や、その感覚に対する intentionale なはたらきによって成立した個物の似像としての身体的器官の内に実在する可感的 intentio は非質料的知性とは同じ在り方 (modus existendi) を有さず、知性に対して直接的に intendere し、それに intentionalis な変化を生ぜしめることはできない。即ち、質料的物事はただ可能態においてのみ知性に対する intentio を有しているのにすぎない。⁽⁵⁾ そこで能動知性が、内部感覚の一つである表象力において表象として実在するようになった可感的 intentio を照明し、それをとおして対象としての質料的物事の可知的形相を把

え、そのものが可能的にのみ有していた知性に対する *intentio* を現実化するのである。ここに可知的形象 (*species intelligibilis*) としての可知的 *intentio* が成立する。このような可知的 *intentio* をその形相として、これによって可能知性は限定され、また現実化されて、ここに知性による認識が成立する。可知的 *intentio* とは認識のはたらきの形相的根源 (*principium intellectualis operationis ut forma*) であり、⁽⁷⁾これによって限定された知性は自らのうちに、可知的 *intentio* と同様その対象の類似としての、認識されるものについての何らかの *intentio* (*quaedam intentio rei intellectae*) 即ち *intentio intellecta* を形成 (*formare*) する。*intentio intellecta* は知性的はたらきの終局 (*terminus*) であり、これにおいて認識するものとされるものとは *intentionale* な次元において一 (*unum*) となるのである。*intentio intellecta* は知性的はたらきの根源として知性を現実化するところの可知的 *intentio* とは異なったものである。可知的 *intentio* とは認識される対象の側からの知性に対するはたらきかけであり、それに対して *intentio intellecta* とは知性自身の側からの対象それ自体への指向であろう。このような *intentio intellecta* とは *ratio* でもあり、また外的音声によって指示される⁽⁸⁾ところの、その範型 (*exemplar*) としての精神の内的言葉 (*verbum interius*) でもある。

このような感覚や知性における *intentio* は、先に述べられたような、アウグスティヌスの言うところの、認識されるものと視像や心象などとの間に成立する *intentio* と同一のものであろう。ただし、トマスにおいては、*intentio* という言葉は、認識するものと認識されるものとの間に成立するはたらきとしての意味と、認識するものの内に *species*, *ratio*, *verbum* といった形で成立するそのはたらきの結果としての意味の両方を有していると思われる。

これまでに述べられたような認識の *intentio* を前提した上で、次に成立するのが欲求や意志の *intentio* である。感覚や知性によって認識された欲求や意志の対象あるいは目的となりうるものは、知性や感覚において完全な自然本性的エッセによって (*secundum esse naturale perfectum*) 実在するのではなく、先に述べられたように、*intentio* という様態によって (*per modum intentionis*) 主体の内に先在 (*prae-existere*) するのであり、この *intentio* という形で主体に内在している目的の形相が内在的形相因として、その知性や感覚に伴うところの意志や欲求を動かし、その目的へと *intendere* せしめるのである。そしてその主体はその目的を自然本性的エッセ

の次元において獲得し、それと一致しようとするのである。⁽⁹⁾

これまでに述べられてきたような、感覚、知性、欲求、意志などにおいて人間が有するすべての *intentio* を包含し、また統合するのが魂の *intentio* (*intentio animae*) である。これは、言わば、精神の集中であり、これによってそれぞれの人間の能力は方向づけられ逐行されるのである。この魂の *intentio* とはどのようなものか次に考えてみたい。

すべての魂の能力は魂の一つの本質 (*essentia*) に根ざしているが故に、魂の *intentio* がある一つの能力のはたらきへと引きつけられているときには、魂の *intentio* は他の能力のはたらきからは後退してしまう。なぜなら、一なる魂には一なる *intentio* しか属しえず、魂の *intentio* はその魂の一なる本質にその基盤 (*fundamentum*) を有しているからである。このことの故に、もしある対象が自らにすべてのあるいは大部分の魂の *intentio* を引きつけているならば、逆に他の、その認識や欲求、情念のために多くの注意 (*attentio*) を必要とするものは、そのとき認識や欲求、情念の対象とはなりえない。即ち、ある一つのはたらきにすべての *intentio* が向っている場合には、それに対立するはたらきは妨げられるのである。例えば、感覚的な悲しみや喜びが最も魂の *intentio* を引きつけているとき、その人間は何か新しいことを認識したりすることはできない。なぜなら、全く新しいものを認識したり、それについて学んだりするためには多くの *intentio* が必要だからである。また特に大きな悲しみの前では、人間は既に知っていることさえも考えることができな⁽¹⁰⁾い。また例えば、魂の *intentio* が何かを聞きとることに適用 (*applicare*) されているとき、その人は横を通り過ぎる人にも気がつかないであろうし、何かを見ることに精神を集中しているならば、語られていることを同時に認識することはできない。また逆に、あることを認識しようとしていても、そのことへの魂の *intentio* の適用が不充分であるならば、すぐに他のことに気をとられて、*intentio* はそちらの方向へと分散してしまう。

このような魂の *intentio* の在り方から、あるときはAのものへ、またあるときはBのものへと、多くの異なったものへと様々な仕方で向うという、人間の魂の有する一種の拡がりや理解されるであろう。即ち、質料的身体と深く結びついた魂は常にこの質料的身体をとおして質料的世界へと *intendere* し、そのうちに存在する様

様の異なった質料的事物を認識したり、欲求したりしているのである。魂の *intentio* が常に魂自身の本質から離れ、自らよりも下位に位置するところの質料的世界のあらゆる方向へと様々な仕方で向っているというこのような状態は、トマス自身はそのような言葉を用いてはいないが、魂の質料的世界への分散 (*distentio*) と言い換えてもよいであろう。これに対し、神や天使においては、その知性や意志の *intentio* は常に神自身の本質へと向けられており、そこからはずれて他の方向へと分散してしまうようなことはあり得ない。

このような在り方の相違は言葉の在り方においても見い出されるであろう。人間は感覚をとおして知性が質料的世界から何かを認識することにより、*intentio intellecta* としての精神の内なる言葉を形成するが、このような質料的世界から可感的及び可知的 *intentio* をとおして形成された内的言葉は再び *intentionale* な仕方で内部感覚において実在する音声の似像と結びつき、音声や文字といった質料的な形でこの質料的世界の中へと発出せられ、伝達される。即ち、我々人間の精神の内的言葉はこの質料的世界の中へと拡がり、分散してゆくものなのである。これに対して、神においては、その自己認識において成立した *intentio intellecta* としてのその内的言葉は、神の完全な *imago* として、その本質と実在 (*substantia*) を神自身と同じくし、神の内において三位一体 (*Trinitas*) の一つの *persona* である子 (*Filius*) として止まっているのである。⁽¹³⁾

上に述べられたような質料的世界への分散とは、人間にとって本性的な状態であろう。そしてこのような状態から脱し、質料的世界の外へと向い、分散の状態においては不可能な神の本質の直観を得るということが、脱魂 (*raptus*)、超出 (*excessus*)、解脱 (*extasis*) などと呼ばれることである。このようなことは人間にとって超自然的なことであり、そのためには神からの恩恵 (*gratia*) をも必要とすることであるが、トマスはこのことを次のように説明している。——如何なる認識においても、アウグスティヌスの言うごとくに *intentio* が必要なのであるが、非質料的本質は最も強く (*vehementissimum*) 可知的なものであるが故に、我々の知性がこのようなものに到達するためには、魂のすべての *intentio* を知性に集め、最大限の努力によって神へと *intendere* しなければならず、そうしなければ、知性が神の本質の直視にまで高められることはない。ところで、同じ魂の有する感覚と知性とは同一

の魂の *intentio* をそのはたらきのために必要とし、純粋な知性のはたらきのためには感覚は邪魔なものとなる。それ故、神の直視のためには、我々はまずすべての外的感覚から上昇し、そこから完全に引き離されなければならない。即ち、感覚をとおしてこの質料的世界へと分散しながら *intendere* することをやめ、すべての魂の *intentio* を自己自身をとおして神へと向けなければならないのである。⁽¹⁴⁾

これまでに述べられたことによると、トマスにおいて考えられた分散とは *intentio* の質料的世界への拡がりであり、アウグスティヌスにおけるそれは時間への拡がりであった。それでは次に、トマスにおいて考えられた人間の有する質料的世界への分散という状態と時間との関係について考えてみたい。

トマスは、アリストテレスに従って、⁽¹⁵⁾ 時間を「より先、より後の観点より見た運動の数」(*numerus motus secundum prius et posterius*) と規定しており、また時間なしには継続 (*successio*) は認められず、運動なしには時間もありませんとしている。このような時間は何らかの可能態性を含み、可能態から現実態へ、また現実態から可能態へといった運動を受け入れうるものすべてに、即ち石ころから天使、そしてこの一つの被造的世界全体にいたるまでのすべてのものに、それぞれのものの在り方⁽¹⁶⁾ から従って、それらの各々に固有な仕方⁽¹⁵⁾ で根源的に内在しているように思われる。このアリストテレスによる時間の規定に従えば、時間とは決して人間の精神のうちのみ存在するものではなく、運動や変化を有しうるすべてのものに内在することになり、あらゆる事物の有する運動と、そのものに内在するそのものに固有な時間との関係を考えることは自然学上の大きな問題となるであろう。しかし、アウグスティヌスによれば、我々がそれによって音や他のものの運動の時間的長さを測るのは、あくまで我々の精神に内在する我々に固有な時間によってであり、彼は我々人間に固有な時間のみを時間として考察している。それ故、ここでは人間に固有な時間のみを考察の対象としたい。

人間のような知的実体においては、時間はより根源的で、より内在的なものとなっているように思われる。それでは、人間の精神の内に時間は一体どのような仕方⁽¹⁶⁾ で内在しているのでしょうか。このようなことを考える上で *intentio* は重要な意味を持ってくると思われる。

神の知 (*scientia*) においては、すべてのものは一つの *intentio* のもとに把えられ

る。というのも、神は自らの本質に *intendere* することによって自らを完全に認識するのであるが、このことは自らの本質をそのすべての能力について認識することでもあり、それらの神の能力のもとには存在するすべてのものが包含されている。それ故、神は自らの本質を認識することにおいて、同時にすべてのものを認識し、またその認識に基づいて意志するのである。このような一なるはたらきによる神の知性認識は神自身のエッセと全く同一であり、そこには如何なる可能態性も、より先、より後ということに基づく継続、運動といったこともあり得ず、そこには時間の入り込む余地はない。

しかしながら、感覚をとおしてこの質料的世界へと *intendere* することによって認識を行う人間の知性は同時にすべてのものを認識することができない。その理由は次の如くである。人間の知性は質料的物事から *intentio* のはたらきによって把握された様々な可知的形象によって形相づけられることによってそれらを認識し、またこの認識に基づいて意志するのであるが、可知的形象あるいは *intentio* と呼ばれるものはすべて一つの類 (*genus*) に属している。そこで、現実態における知性は現実態における認識されたものであると言われるのであるが、もし知性が同時に多くのものを認識するとすれば、同一の類に属するところの様々な異なった形相によって同時に形成されることになる。しかしこのようなことは不可能である。なぜならそれは、ある同一のものが同時に赤く着色され、かつ熱くされるということは可能であっても、同時に赤く着色され、かつ青く着色されるということや、同時に熱くされ、かつ冷たくされるということが不可能であるのと同様だからである。それ故、何らかの仕方で同一の *intentio* のもとに入りうるようなものでなければ、それらのものが同時に認識されるというようなことはあり得ない。すべてのものが同時にそのもとへと入りうるような *intentio* とは神の有する *intentio* のみであり、質料的物事から抽象されたような可知的 *intentio* のもとには、その物事やそれとお互いに強く秩序づけられたようなものしか入り得ない。そこで質料的世界へと常に *intendere* している人間の知性は、そのような *intentio* によってあらゆるものを次から次へと継続的な仕方でも認識してゆかねばならない。このような知性はあるときは現実態にあり、またあるときには可能態にある。即ち運動の状態にあるということである。知性は第一のものを現実態において認識しているときには、第二のものを可

能態においてしか認識していないのである。このようにして、根源的な仕方では質料的世界へと分散している人間の精神は、また同時に運動や継続という状態を根源的な仕方でも有しており、このことにおいて知的実体としての人間は自らのうちに根源的な仕方でも時間というものを⁽¹⁷⁾も背負い込んでいるのである。つまり我々の有する質料的世界へと分散している精神が様々な質料的物事を *intentio* によって継続的に認識してゆくことにおいて、既に認識したものについての記憶が *intentio* のはたらきによって過去として精神の内に成立し、またこれまでに認識されたことに基づいて、これから継続的に認められるであろうことへの期待が *intentio* の同じようなはたらきによって未来として成立する。そしてこのとき精神は、質料的世界という自己の外へと分散することにおいて、また同時に自己の内において、その *intentio* が、あるものに対する直視としての現在から、記憶としての過去と期待としての未来への二方向へと拡がり分散することによって時間へと分散するのである。このようにして、*intentio* という精神の根源的なはたらきとその分散によって精神のうちに時間が成立するのである。

また、このような時間への分散の状態からの脱出は、先に述べられたような、質料的世界からの解脱 (*extasis*) と同じような仕方によって可能となるであろう。これはアウグスティヌスの言う、時間からの *extentio* による脱出とも共通したことであると思われる。

註

- (1) Augustinus, *Confessiones*, VI, 1, 2.
De Trinitate, XI, 1, 2.
- (2) Augustinus, *Confessiones*, XI, 14, 17. sq.
- (3) Thomas, *De Verit.*, q. 8, a. 13c. ; q. 13, 3c.
- (4) Thomas, *De Verit.*, q. 26, a. 3, ad 4.
- (5) Thomas, *S. T.*, I, q. 78, a. 3c.
- (6) Thomas, *De Verit.*, q. 10, a. 8c.
- (7) Thomas, *S. C. G.*, I, 53.
- (8) Thomas, *S. C. G.*, I, 53. ; IV, 11.

- (9) Thomas, *De Verit.*, q. 22, a. 12c; *S. T.*, I - II, q. 26, a. 2c.
 (10) Thomas, *S. T.*, I - II, q. 37 a. 1c.
 (11) Thomas, *De Verit.*, q. 4, a. 1c.
 (12) Thomas, *S. C. G.*, IV, 11.
 (13) Augustinus, *De Trinitate*, X, 1, 2.
 (14) Thomas, *De Verit.*, q. 13. a. 3c, 4c.
 (15) Aristoteles, *Physica* IV, c. 11, 219 b1~2.
 (16) Thomas, *S. T.*, I, q. 66, a. 4c.
 (17) Thomas, *S. C. G.*, I. 55.

付記

トマスの *intentio* 研究に関する文献として、筆者が目をとおし、何らかの形で参考としたのは次のようなものである。

- (1) Simonin, H. D., La notion d' "Intentio" dans l'oeuvre de S. Thomas d'Aquin. *Revue des Sciences Philosophiques et Theologiques* 19 (1930) pp. 445 ~463.
 (2) Heimler, A. M., *Die Bedeutung der Intentionalität in Bereich des Seins nach Thomas von Aquin.* (1962)
 (3) Anzenbacher, A., *Die Intentionalität bei Thomas von Aquin und Edmund Husserl.* (1972)

特に(1)は20頁ほどの短い論文ではあるが、トマスの著作全体において、*intentio* という語が、どのような箇所で、どのような意味において用いられているかについて調べ、それらを、*motion instrumentale* としての *intentio*, *intentio finis*, 認識される対象の在り方としての *intentio* といった三つの意味に大きく分類して示した、lexical な研究であり、トマスの *intentio* について研究を進める上で、研究成果を踏まえた上で、*intentio* と存在との第一に参考とすべき有益な論文であると思われる。(2)も(1)や Hayen などの研究成果を踏まえた上で、*intentio* と存在との関連について考察したものである。

また(2)の巻末には、*intentio* 研究に関する詳しい文献表が付せられているので、そちらも参照のこと。